記　入　日　2012 年　1 月 17 日

1．概　要

実践団体名	高津養護学校　たかつ地域ネットワーク推進会議		
連絡先	TEL：044-865-0477		
プランタイトル	たかつ　地域との協働による 障がい者･高齢者等要援護者支援のための防災シミュレーション訓練		
プランの対象者※1	特別支援学校児童生徒・教職員・保護者・地域住民・障がい者・高齢者・ボランティア	**対象とする災害種別**※2	地震

※1　別紙「記入上の留意点」の1．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※2　別紙「記入上の留意点」の2．項目から1つ選択し、記入してください。

【プランの目的・ここがポイント！】

５年目を迎える、障がい児者や高齢者等災害時要援護者と地域住民（町会・自治会）協働の防災シミュレーション「避難所設営訓練」。訓練を通し障がいのある児童生徒の防災意識を育てるとともに社会参加への機会とする。また、学校と地域との協力・協働による訓練をとおして、障がい者や高齢者等要援護者に配慮した避難所設営や運営のあり方を探りたい。さらに、障がいがある児童生徒と地域住民との交流の機会とし、障がいの理解推進や学校理解を図り地域コミュニティ活性化の一助としたい。

【プランの概要】

- 障がいのある方の保護者や支援者向け防災学習会の開催（４回）
- 障がいのあるこどもと保護者による「防災キャンプ（親子夜間避難所設営体験）」の開催
- 災害時に要援護者を支援する防災ボランティア養成講座の開催
- 地域との協力・協働によるぼうさいシミュレーション（避難所設営訓練）の開催
- 保護者・支援者のための「地震防災ガイド」の発行
- 地域向け防災対策事業実践報告会や防災講演会「東日本大震災における障がい児者を取り巻く状況」の開催
- 地域向け2012ぼうさいカレンダーの発行

【期待される効果・ここがおすすめ！】

〇地域住民と障がい児者など要援護者協働による訓練であり、障がいの理解、学校の理解推進が図れること
〇具体的な場所（学校体育館や教室）を使用した避難所設営訓練であり障がいがある子供にとってわかりやすい訓練であること
〇地域町会や自治会とボランティア団体･学校が連携･協力し、実際に避難所設営に近い訓練内容となっていること
〇災害時の障がい者等要援護者支援を目途とした具体的、実践的な訓練であること

２．プランの年間活動記録（2011 年）

	プランの立案と調整	準備活動	実践活動
6 月	第１回たかつ地域ネットワーク推進会議において事業計画詳細案・実施案の検討・承認	事業計画詳細案・実施案作成	詳細案・実施案の検討と承認
7 月	第 1.2 回保護者・支援者向け防災学習会開催、親子防災キャンプ（兼夜間避難所設営体験）、東日本大震災被災地障がい児者支援活動	チラシ作成・広報活動・募集事務	第 1･2 回：東日本大震災における障がい児者を取り巻く状況と避難所の状況 親子防災キャンプ（夜間避難所設営体験）
8 月	被災地障がい児者支援活動、教職員等支援者向け防災学習会開催	チラシ作成・広報活動・募集事務	地域防災環境の学習のためＤＩＧ（図上訓練）を実施
9 月	第 3･4 回保護者・支援者向け防災学習会開催	チラシ作成・広報活動・募集事務	3 回：川崎・横浜両市の大規模災害時要援護者支援の取組と要援護者登録制度 4 回：東日本大震災における障がい児者を取り巻く状況
10 月	第２回地域ネットワーク推進会議、ボランティア養成講座、防災シミュレーション訓練	事業中間報告案作成 チラシ作成・広報活動・募集事務、進行案検討	チャレンジプラン中間報告 ボランティア向け障がい者支援技術、東日本大震災における避難所の状況、 避難所運営のあり方検討など
11 月	参加者アンケート集約、「防災ガイド」発行準備、被災地障がい児者支援活動	アンケート集約 支援者向け「防災ガイド」原稿作成	訓練参加御礼通知 アンケート集約と編集作業 実践報告会案内発送
12 月	支援者向け「防災ガイド」発行準備 地域向け実践報告会・防災講演会案内	支援者向け「防災ガイド」原稿作成 実践報告書原稿作成	「防災ガイド」編集作業 実践報告書編集作業
1 月	被災地障がい児者支援活動、地域向け実践報告会及び防災講演会	実践報告会、防災講演会開催準備	地域向け実践報告会、防災講演会開催 ぼうさいカレンダー編集作業
2 月	チャレンジプラン最終報告会参加 地域行政向け実践報告書作成と報告、 第３回地域ネットワーク推進会議、支援者向け「防災ガイド」発行	最終報告会プレゼン資料作成 地域行政向け報告プレゼン資料作成、年間活動実践報告と確認、「防災ガイド」印刷発行	チャレンジプラン最終報告会 地域行政向け実践報告 ぼうさいカレンダー編集作業、「防災ガイド」発行
3 月	次年度実践計画の作成 防災カレンダー発行	次年度実践計画の作成と調整 防災カレンダー発行準備、発送準備	次年度実践計画の作成と地域との調整 防災カレンダー発行、発送

３．実践したプランの内容と成果

【実践プログラム番号：①】※3

タイトル	第１・３・４回障がい児者の保護者・支援者向け防災学習会
実施月日（曜日）	7 月 8 日（金）、9 月 14 日、28 日（水）
実施場所	ＮＰＯ法人わかくさ「若草の家」（1 回）、高津養護学校（2･3 回）
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：植山　利昭　他１名 所属・役職等：川崎災害ボランティアネットワーク会議代表
所要時間または「コマ数×単位時間」	（1 回）２時間３０分、（２・３回）２時間
プログラムのカテゴリ、形式※4	項目２．学習会
活動目的※5	項目６．防災に関する知識を深める
達成目標	災害時に障がい児者を支援する当事者となる保護者や支援者に対し、災害についての学習を通し、災害時の状況と理解をすすめる。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	（１）東日本大震災や過去の大災害の実態と大規模災害時要援護者への行政の対応 （２）川崎・横浜両市の大規模災害時要援護者支援の取組と要援護者登録制度 （３）大規模災害時の高津養護学校の対応と平常時の取り組み
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	・　災害ボランティア講師 ・　机・イス・プロジェクター・ＰＣ ・　ＤＩＧ用地図、マジック、テープ、ポストイット
参加人数	第１回１２名、第３回１４名、第４回１４名
経費の総額･内訳概要	24,000 円（講師謝礼・講師交通費：高津区協働事業費より）
成果と課題	【成果】普段学校に来る機会の少ない保護者が１２名参加した。また、障がい者施設での開催のため支援者である施設職員も参加した。 【課題】勤務時間外と言うこともあり保護者以外の支援者である施設職員の参加が少なかった
成果物	◆第 1 回 7 月8日(金)19:00～22:00（福祉施設での開催） ･夜間開催で父親の参加が中心（12 名） ･東日本大震災での避難所の状況が災害ボランティアより報告あった。（精神障がい等のある方へ配慮できたかとは言いがたい等の状況について） ･本人（身障者）の参加があり、「福祉避難所の設定は実際の災害時には人口規模に比べ圧倒的に少なく、不安！」など具体的な議論ができた。 （事前登録制度の問題点や二次(福祉）避難所の周知について）

・発達障がい者対応福祉避難所の必要性が議論された。
（今回の震災により自閉症等発達障がい者の避難生活の困難性が多く指摘された。保護者として行政の対応を待つのでは遅いのでは。自前で確保する手もある。）
1．東日本大震災の現場から
☆3 月 11 日の地震を受け、いったい被災地の福祉の現場は今どうなっているのか？
(1) ニュースウォッチ 9 の映像より －
① 作業所：閉鎖が相次ぎ、再開の目処が立たず、知り合いの作業所を訪ねながら再開の手を探っている。
・空き家となっている民家で再開を目指す→立ち上がった人たちとどう手を携えていくか
・高齢者など他の災害時要援護者と比べて対象の少ない障がい者の施設の復興は遅れている
② 利用者さん：震災により行き場をなくした障がい者が多く、避難所暮らしにより様々な弊害が出てきている。
・避難所生活でかつては起きなかった発作が起きるようになった
・ほとんど避難所から出ない　理由 ： 友達がいない・元気が出ない・周りは知らない人たちばかり
・誰に相談していいかわからずパニックになる
(2) 実際に現場に行かれたボランティアさんの感想
・小学校等の一次避難所は規格化されている。しかし二次避難所は場所を指定しているだけ。それではダメだ。障がいは身体障がいもあれば知的障がいもある。それがすべて同一の対応ではいけない。
・二次避難所については実際に養護学校の教職員や施設で働く人たち「プロ」が行政に働きかけることが重要。
・3 月 11 日は金曜日の午後なので職員や先生はいるけども電話が繋がらないので食料等がいつ届くかもわからないという状態が続いた。
・精神病院は避難所指定ではないので食料の保管等がなく、物資が回ってこなかったのが現実だ。
・最近も行ったが瓦礫はまだまだ残っている。政府は復興というが、現地は復興どころではない。
・作業等の施設は全く復興できず、障がい者は今でも在宅待機者が多く、保護者の負担が大きくなっている。
・津波はあぜんとする、何から手を付けたらいいのかわからない状況だったというのが自然な感想。
・とにかくガソリンが不足した。首都圏等でのガソリン等の購入は一般車は控えられても作業所等の施設では利用者さんの送迎等や品物の販売があるので買わざるを得ない。
・福島原発による避難 400 世帯 1,500 名を横浜川崎は受け入れている。まとまって受け入れているのは宮前区。
・阪神淡路大震災よりボランティアが少ない。これは「今は登録制じゃないとダメ」「事務手続きが邪魔している」「地元民じゃないとダメという風土がある」が原因ではないか。
・今回の地震で障がい者施設は山奥にあり助かったところが多い。しかし、だからといって障がい者は山奥に、となるとそれは問題である。ノーマライゼーションの観点からいうとそれは逆行しているのではないか。
2．災害時の対策について
(1) 保護者へのアンケートより
障がい者の親や支援者は災害発生時の避難所に対してどのような思いを持っているか。
・避難所に福祉関係の部屋があるとよい
・一般避難所では過ごせない
・大好きなもの、例えばテレビが映らずパニックになる
・避難所では迷惑をかけてしまうので自動車での生活になるのではないか
(2) 災害時の避難所について

☆日頃から災害時の対応については持ち物等準備を進めている一方で、上記からは「避難所」の観点がクローズアップされてくることがわかった。避難所の在り方、避難所での生活の仕方、または避難所の準備という視点から検討を進めることが必要ではないか。

① 避難所の確認

自宅近くの避難所だけでなく二次避難所、または福祉避難所も確認が必要。二次避難所や福祉避難所は情報が開示されていないケースが多いが、丁寧に検索すると pdf が出てくることもある。

② 避難に関する準備

ア. **事前登録制度があるのであれば登録しておく。**

例えば、世田谷区は二次避難所が 60 から 70 あるが、世田谷区は 80 万人住んでいる。そのうち 5 パーセント 4 万人が障がい者と想定すると、これでは二次避難所はとても足りない。

では、災害時に障がい者向けトリアージができるのかというと、できないのが行政の本音である。だから行政としては事前登録制をとり、災害時に登録されている人を優先的に二次避難所へ避難させるとしているが、民生委員さん等に「うちは障がい者がいると言えない」という理由で登録できていない人が多いのが現状である。

イ. 普段の避難訓練以外にも避難所訓練を実施する

キャンプを通じて普段とは違う場所での生活や、テントでの寝泊まり訓練を実施する。

◇昨年行った「おやじのキャンプ」を今年も実施しテントでの寝泊まりにもチャレンジする。

③ 避難所の準備

一次避難所に指定されていなくても、災害時に避難所申請・指定を受ければ物資だけでなく医療の提供も受けられる。（今回の大震災では災害後の指定が機能しなかったことも事実である。）

このことから、空家等を活用して二次避難所・福祉避難所としてあらかじめ指定を受けておくことについて検討するのもよいのではないか。

課題は多い：差配するのは区や社協・・・指定避難所ではない県立養護学校等は、そのため日頃から社協等と一緒に防災訓練をしている。

おやじの会では今、中長期計画を進めている。場当たり的なことでなく長い目でみた計画が必要であり、その意味では防災は一つの課題である。

今後引き続き、おやじの会として何ができるのか検討していく。

◆9月 14・28 日（水）:第 3・4回保護者・支援者向け学習会（10:00～12:00 計 22 名参加）

・内容：①東日本大震災時の障がい児者や施設等の状況と保護者・支援者の役割（夏休みのボランティア活動を通して）

②DIG（図上訓練）を通して、地域の防災環境を学ぶ（地域理解と障がいの理解啓発）

③川崎市・横浜市の災害時要援護者支援制度について

・成果：

①宮城県でのボランティア活動体験からリアル感のある報告ができた。

②居住地域での関係作りに関心が深まった。

③発達障がい児の災害時避難所について感心が深まった。

④日ごろの訓練の大切さについて感心が深まった。

※3 本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。

※4 別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）

※5 別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

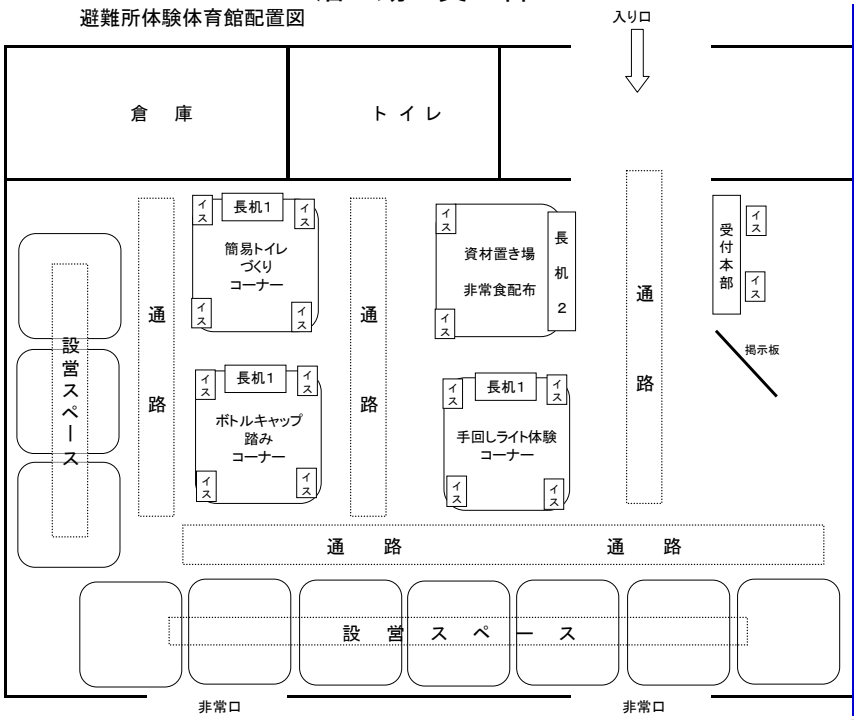
【実践プログラム番号：②】※3

タイトル	第 2 回保護者・支援者向け防災学習会兼夜間避難所設営体験（親子防災キャンプ）
実施月日（曜日）	7 月 23 日（土）
実施場所	高津養護学校体育館
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：植山　利昭　他 1 名 所属・役職等：川崎災害ボランティアネットワーク会議代表
所要時間または「コマ数×単位時間」	5 時間（13:30～準備、16:00～受付、16:40～設営訓練、17:30～親子体験、20:30～振り返りアンケート記入、片付け、21:00 解散）
プログラムのカテゴリ、形式※4	項目2. 学習会　16.避難・防災訓練
活動目的※5	項目 1. 遊び・楽しみながらの防災　4. 災害を想定した避難所体験
達成目標	障がいのある子どもたちと保護者・支援者による災害時避難所設営体験を夜間に実施。親子による防災学習をすすめ、体験を深める。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	①避難所設営 〇ウレタンマット2、ダンプレート4を受け取り、指定された範囲に設営する。〇ご家庭から持参されたタオルケット等で、ゆったり休めるよう工夫する。〇各家族の入り口付近に名票（カタカナで）と要援護トリアージ用テープを掲示する。（緊急援護要請は赤、要援護要請はオレンジ、巡回援護要請は黄色のテープを掲示する） ②防災体験（親子で一緒に）17:30 頃～ⅰ）食料確保＆安全ルート確認（地図を見ながら安全ルートをすすみます）　ⅱ）簡易トイレづくり（避難所で不足するのがトイレです。ダンボールでつくってみましょう。）　ⅲ）手回しライト体験　ⅳ）ボトルキャップ踏み（災害時に足裏を守ることがいかに重要か体験します）
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	訓練指導講師：植山利昭他 1 名・準備物：長机 6. イス 16.ウレタンマット 60、ダンプレート 80、ボトルキャップ多数、ダンボール箱 20. 組み立て簡単トイレ 5. ブルーシート 5、養生テープ5, ビニールゴミ袋 15 乾パン 12,.非常水 00. 蚊取り線香 5.手回しライト＆ラジオ 10.雑巾、足ふきマット、モップ、記録用カメラ
参加人数	本校児童生徒 15 人、保護者支援者 28 人、ボランティア 3 名、職員 4 名、指導者 1 名、 地域の見学者 36 名、計 87 名
経費の総額・内訳概要	指導者講師謝礼・交通費 22,000 円、参加者保険料 5,460 円、非常食・非常水 3,000 円、ダンボールトイレ 4 個 12,000 円、計 42,460 円（川崎市高津区協働事業費より）
成果と課題	【成果】参加申込者が少なく不安もあったが、見学者が 40 名近く、想定した以上の参加者があった。保護者と一緒の訓練なので子どもたちも安心して参加できた。 【課題】地域の要援護者の方も参加できるよう体制作りを進めたい。

成果物

活　動　資　料

避難所体験体育館配置図



親子防災キャンプ（夜間避難所設営体験）17:00～21:00

夏の日はまだ長く外からの
灯りで設営します

「すみか」作りは親子で
わくわく体験です

テント設営ははじめての体験です。
興味津々！

食料も無事確保できました

災害時にはだしは危険です「イタイ!」

手回しライトは意外に明るい！

○障がいのある子どもでも参加しやすいよう、「いつもの体育館」を利用しています

○カラーマットや衝立は安心感を与えます。

○夜間訓練ならでは「手回しライトが意外に明るい！」と保護者に好評。

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：③】※3

タイトル	教職員等支援者向け防災学習会
実施月日（曜日）	8 月 29 日（月）
実施場所	高津養護学校音楽室
担当者または講師	担当者・講師等の区分：本校教諭 氏　　名：今泉修一 所属・役職等：総括教諭
所要時間または「コマ数×単位時間」	3 時間（午後１時から４時）
プログラムのカテゴリ、形式※4	項目２. 学習会
活動目的※5	項目６．防災に関する知識を深める
達成目標	赴任間もない教職員は学校周辺地域の防災情報を未学習である。そこで、ＤＩＧ（図上訓練）を行い、地域理解に努めた。
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	○　川崎市及び高津養護学校の防災対策について ○　学校周辺地域の地域的特徴と防災環境 ※９名を２グループに分け、グループワークと成果発表により、学習をすすめた。
準備、使用したもの ・人材 ・道具、材料等	○　神奈川県職員としての災害時の行動マニュアル ○　高津養護学校の災害時対応マニュアル ○　川崎市の防災対策について ○　学校周辺の地図、マジック、ポストイット、テープ、ゴミ袋
参加人数	教職員 9 名、指導者 2 名
経費の総額･内訳概要	特になし
成果と課題	【成果】近年、教職員の移動により地域情報の理解が進んでいない赴任 1･2 年目の教職員を対象に地域の防災情報を学習した。 【課題】特別支援学校の職員として、災害時に地域の障がいのある方々を支援するスキルを学んでいきたい。
成果物	※ＤＩＧで作成した防災環境地図

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3. 項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4. 項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム番号：④】※3

タイトル	災害時要援護者を支援する防災ボランティア養成講座
実施月日（曜日）	10 月 22 日（土）
実施場所	高津養護学校小学部集会室
担当者または講師	担当者・講師等の区分：講師 氏　　名：勝田氏他 2 名 所属・役職等：障害者施設しらはた施設長
所要時間または「コマ数×単位時間」	６時間（午前 9 時から午後 4 時）
プログラムの　カテゴリ、形式※4	項目２. 学習会
活動目的※5	項目６．防災に関する知識を深める
達成目標	災害時に要援護者支援にあたる方々に、防災意識の涵養と障がい者理解を図る
実践方法・進め方（箇条書きまたはフロー）	○　災害時における障がい者理解の実際と 3. 11 時の川崎市障がい者施設の状況報告 ○　3. 11 被災地における避難所の状況報告 ○　災害時における避難所の設営と運営（川崎市高津区避難所運営マニュアルから高津区防災対策担当者が説明） ○　避難所運営ゲーム（ＨＵＧ）の実施と体験
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	○　川崎市障がい者施設における 3. 11 の状況アンケート結果報告 ○　障がい特性について（以上、障がい者施設職員から） ○　3. 11 被災地の記録写真と避難所の状況説明（災害ボランティアから） ○　川崎市の高津区の防災対策と避難所運営についてについて（高津区防災担当職員から） ○　ＰＣ，プロジェクター、学校周辺の地図、マジック、ポストイット、テープ、ゴミ袋
参加人数	11 名、指導者 4 名
経費の総額･内訳概要	12, 000 円（講師謝礼・講師交通費：高津区協働事業費より）
成果と課題	【成果】3. 11 時に川崎市内の障がい者施設がどう動いたか詳細なアンケート報告があった。また、障がい特性とその特長について、障がい者施設職員から報告があり、特に発達障がい者への対応について、理解促進が図られた。また、3. 11 被災地における避難所について、現地での活動をされた災害ボランティアから障がい者の取り巻

	く状況について報告がありその困難性が指摘された。川崎市高津区の災害対策担当職員から高津区の災害時避難所とその運営方法について報告があり、避難所の開設や、訓練の必要性が提起された。また、避難代運営ゲーム（ＨＵＧ）を実施し、時間を追って変わる状況に戸惑いながらリアルなシュミレーションが実施できた。 【課題】要援護者の支援者と行政の防災担当者の災害時の対応について、意見のすりあわせが必要であると感じた。
成果物	※参加者の感想アンケートから 日程については学校行事等もない時期なので良いと思う。また、震災から半年強が経過し、情報が落ち着いてきたころにまとめてお話が伺えました。 時程については 9 時半もしくは 10 時スタートでも!・教育実習の関連で遅れての参加でしたが、適した時間設定だったと思います。 ・半日くらいしか時間が取れないので、1 日参加は困難でした。 場所については・来る時に道に迷ってしまいましたがそれは私が地図を読めないからです…。初めて来ましたが、良いと思います。駅からは少し距離があったが、道は分かりやすくてよかった。 講座の内容について ・具体的で、体験にもとづいた話が多かったのでとても役にたった。 ・マニュアル作りで頭がいっぱいだったが、訓練等でマニュアルを練り上げていく必要があると感じました。 ・障がい者と一般の被災地の状況、行政の防災対策などいろいろな立場からの話が聞けて勉強になった。現場を体験されてきた方々の話は、話す内容が多すぎてまとまりにくいようには感じた。 ・興味深いお話、内容だった。3/11 の施設の様子（利用者）、対応などの状況を聞けてよかったです。実際に被災地でのボランティアの活動のお話や映像を見ることができたことは、改めて大災害の意識を持ちました。 ・午後からの参加となりましたが、改めて障がい者の方がいかに大変な生活を強いられたか認識できました。 ・実際に被災地へ行った方々のお話が聞けてよかったです。特にメディアで放送されていない障がい者の方々への実態を聞けて勉強になりました。 ・貴重な話を聞けて充実していた。 講座のレベルについて ・避難所設営ゲームはレベルが私にとって高く、啓発されました。 ・防災、災害時における行政、地域ボランティアの関係や動きなど

	基本的な部分ながら知ることができてよかったです。 ・行政の方から災害等のお話を聞く機会が今まで今までなかったので、分かりやすくお話いただき感謝しています。 ・とてもわかりやすかったです。 ・良かったです。 高津養護学校の今後期待することは ・今後も東日本大震災での障がい者の実態を伝え続けて欲しいです（わかる範囲で）。 ・「避難所に障がい者がいない」という現場での報告がショックだった。 ・弱者、少数派である障がい者の人たちが、災害時であろうと二の次にならず居場所ができるよう障がい者を知る養護学校の先生方から多くを発信していただけることを期待します。 ・引き続き、防災訓練をやり子どもたちの安全を図っていただきたいと思います。 ・避難訓練時マニュアルをどのように行動として具現化しているか、また地域住民の方とどのようなかかわりをもたれていくのか期待しています。 ・障がい者の方々のための避難所が作ることができたらよいと思います。 その他 ・参加者の方とワークショップができてよかったです。勉強になりました。 ・充実した内容で、参加できてよかったと思っています。ありがとうございます。 ・ありがとうございました。 ・今回のような講座があることは、偶然知ることができたが、広く広報し、より多くの人が関心を持ってくれるようになればすばらしいと思った。

※3　本報告書に掲載するプログラム数に制限はありません。また、1 つのプログラムの記載ページ数、各項目の字数等の制限はありません。ただし、枠線の中に記載し、改ページ等は適宜挿入してください。
※4　別紙「記入上の留意点」の3．項目から選択し、記入してください。（複数選択可）
※5　別紙「記入上の留意点」の4．項目から1つ選択し、記入してください。

【実践プログラム⑤】

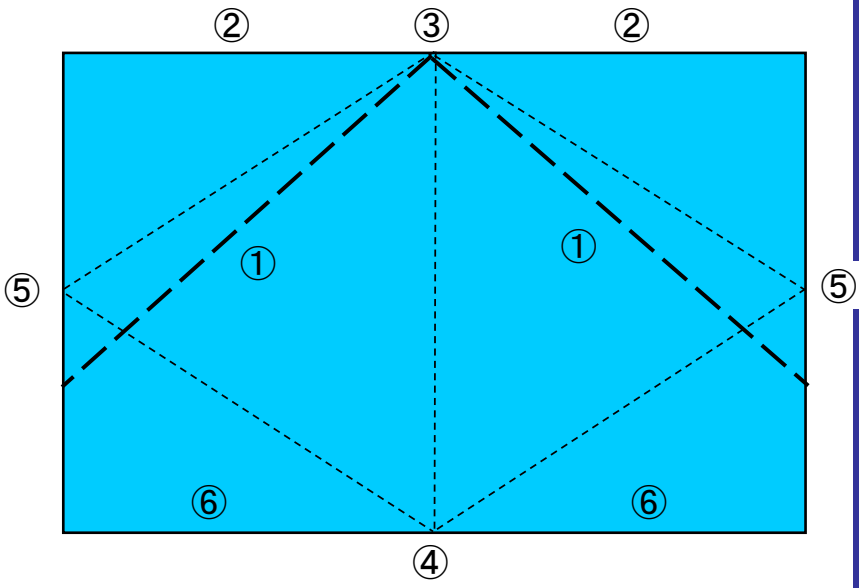
タイトル	災害時要援護者支援を目途とした災害避難所設営の実際と運営訓練
実施月日（曜日）	10 月 29 日（土）
実施場所	高津養護学校体育館その他教室
担当者または講師	担当者・講師等の区分：指導者、講師 氏　　名：植山利昭他 2 名 所属・役職等：災害ボランティア
所要時間または「コマ数×単位時間」	8:30～13:00　4 時間 30 分 （準備：資材運搬など計 5 日 10 時間）
プログラムの　カテゴリ、形式	項目 16. 避難・防災訓練
活動目的	項目４．災害を想定した訓練
達成目標	地域と協働した避難所設営訓練となるか。また、災害時要援護者への理解がすすむか。
実践方法・進め方（箇条書き、またはフロー）	・避難所設営訓練　・避難所運営訓練　・要援護者支援訓練 ・トイレ設営訓練　・足湯訓練 ・ボランティアセンター運営訓練
準備、使用したもの・人材・道具、材料等	・　人材：ボランティア 10 名 ・　資材：プラスチックダンボール・ウレタンマット・組立トイレ・コンクリート平板・ブルーシート・毛布・ヘルメット・掲示板・メガホン・洗い桶・タオル・非常食・非常水・養生テープ・訓練用ボトルキャップ・子ども用プール・文房具等
参加人数	参加者：90 名（児童・生徒・保護者35、一般20、行政・学校等25、ボラ10）
経費の総額・内訳概要	計 111,000 円（資材購入 100,000 円、講師謝礼 11,000 円高津区協働事業費より）
成果と課題	【成果】5 年目の訓練であり、参加者からよい意味での「慣れ」が感じられた。また、障がいのある子どもの参加が多く、地域の方には貴重な経験となった。【課題】前週の雨のため地域行事がずれ込み参加者が予想を下回った（120 名→90 名）。地域の参加者から「訓練を継続して」という要望が多数あった。

成果物

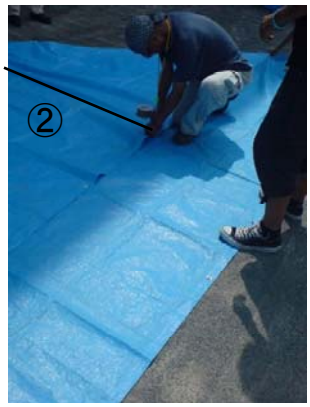
＜非常用三角テントの作り方＞

※必要なもの

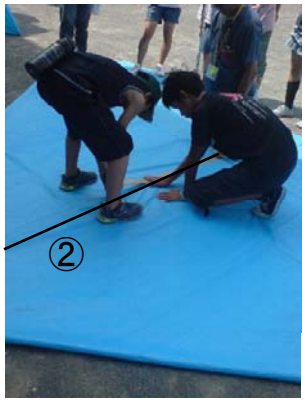
1. ブルーシート3.6m×5.4m1枚
2. 物干し竿（2.5～2.7m）　3. 養生テープ1本（50mm幅）
4. ビニールロープ5mm幅10m程度　5. 金属ペグ20cm5本
6. ペグ打ちハンマー



（1）①をおる（直角三角形の形）



（2）②の2辺を養生テープで貼る

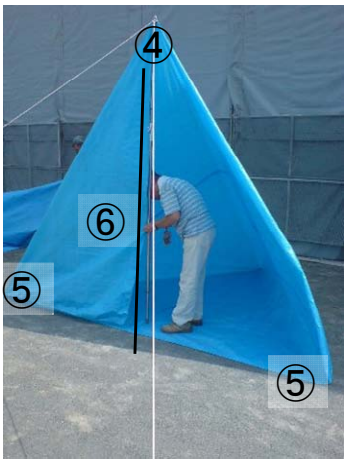


（3） 裏返して③をペグで固定
（風向きに注意し風上に固定）

（4） ④を頂点に物干し竿の先端をくくりつける

（5） 物干し竿を立上げ、形を整えながら
⑤をペグで固定、同時にロープを2本張る。

（6） ロープをペグで固定し完成、
⑥出入口の半分はテープで物干し竿に固定



※入り口は風下方向になるように

＜訓練の様子＞

①事前の説明を受け

②体育館に集合します

③配布物を受取ります

④非常食の体験です

⑤設営が終了しました

⑥ボトルキャップ踏み

⑦簡単テント設営

４．苦労した点・工夫した点

プランの立案と調整で苦労した点工夫した点	川崎・横浜両政令市にまたがる学区を持つ県立学校ということで、地域には「なじみのない学校」であったが、この訓練も５年目を迎え、地域町会・自治会には期待感を感じさせる行事となったと自負している。一方、いい意味での慣れがあり、興味・関心が薄れてきている面は否めない。新しい取り組みや内容の工夫は欠かせない。また、地域との丁寧な関係作りも必須である。当然のことであるが、地域の町会や自治会の集まりは休日のしかも夜間に開催される。当然学校業務の位置づけにはならない。地域との関係作りはこうした努力や地域行事への積極的な参加により、実現性が見えてくる。 また、県内の特別支援学校にその成果を生かす取り組みも必要になってくる。本年は県内での教育研究集会でこの取り組みを発表するとともに、要請されれば他の学校に出かけての成果発表に取り組んだ。	
準備活動で苦労した点工夫した点	５年目を迎え「訓練内容の標準化」を目指している。ただ、障がいの程度は多種多様で対象の設定は難しい。そこで、近年の災害（阪神淡路以降の震災等）で常に話題となる「発達障がい」に視点をあて、「わかりやすい」訓練内容を設定することを心掛けた。「ボトルキャップ踏み」や「手回しライト」はその点で参加者から好評をいただいた。また、従来から取り組んでいる避難所設営に PS ボードを採用していることは、「情報過多」が混乱の原因になりやすい参加者にとって「安心して参加できる」要因となっている。また、スピーカー等放送機器の使用を避け「静かな避難所設営」を目指した。 一方で地域からの参加者にとっては、「訓練慣れ！」を指摘され、内容の新しさが要求されることとなってきた。	
実践に当たって苦労した点工夫した点	児童生徒向けの訓練は教職員の協力も必要である。地域との協働による「訓練」ということで土曜開催になったが、多くの教職員が参加してくれた。 障がい児者支援の専門家として、その専門性を生かし、地域住民やボランティアと訓練できたことは「災害時要援護者支援のための防災訓練」というキーワードを実践できたと自負している。 「要援護者支援訓練」では、本校職員とボランティアが２人１組となって避難所での「聞き取り調査」を行い、トリアージ的な発想でその「緊急度調査」を実践できた。ボランティアの多くは地域の民生委員 11 人の方々で、日ごろ障がい者支援にたずさわる方々である。 また、「足湯訓練」でも「コップ１杯で足湯」のコンセプトを本校養護教諭が提案し、ボランティアと実践できた。日ごろ「災害ボランティア」活動を実践している方々にも少なからず野影響があったようだ。	

５．他の団体、地域との連携

協力・連携先の分類	団体名、組織名	協力・連携の内容
学校・教育関係・同窓会組織	県立麻生養護学校、横浜市立本郷特別支援学校、川崎市立高津中学校	訓練参加協力、防災訓練講師招請
保護者・ＰＴＡの組織	高津養護学校ＰＴＡ、高津養護学校おやじの会、麻生養護学校ＰＴＡ、本郷特別支援学校ＰＴＡ	学習会、訓練参加協力
地域組織	高津第 2 地区社会福祉協議会青少年部会高津区上作延町会・高津区不動丘団地自治会、療育ネットワーク川崎、障がい者施設あかしあ園、しらはた、	学習会、訓練参加協力、ボランティア協力、協働開催
国・地方公共団体・公共施設	川崎市高津区、川崎市高津市民館、高津区社会福祉協議会、	事業助成、参加協力、広報活動協力、シンポジウムパネラー派遣
企業・産業関連の組合等		
ボランティア団体・ＮＰＯ法人・ＮＧＯ等	川崎災害ボランティアネットワーク会議ＮＰＯ法人わかくさ	学習会、防災訓練講師派遣、学習会会場提供、参加協力、ボランティア協力
職業、職能団体・学術組織、学会等		

６．成果と課題（実践したプラン全般について）

成果として得たこと	障がい児者の地域生活を支えるためには、学校の所在地域と子どもたちの居住地域双方での学校理解や障がいの理解推進はかかせない。災害時に要援護者を支援するためには、日ごろからの関係作りは重要である。地域と学校の共通課題である「防災対策」をテーマとすることで、地域との「連携と協働」を推進し、学校理解や障がいの理解推進をはかることは障がいのある子どもたちの地域生活をより安全・安心なものへと向かうことを目的にとしている。 災害時、本校児童生徒のような障がいのある子どもたちが、いわゆる「避難所」で避難生活を送るには非常な困難を伴うことは過去の災害が示している。 地域と協働してこのような訓練を実践できることは、地域にお住まいの災害時要援護者に多少の安全安心を提供できるものと確信する。
全体の反省・感想・課題	参加者の感想意見を集約した。 ①(障がいがある)子供を連れて初めて参加した。避難所の設営など、使うものも初めて見て、良い体験となった。また、パーティションの使用など養護学校ならではの取り組みだなと思った。 ②受付の色違いガムテープによる名札着用は良かった。伝達は掲示板利用により各会場が静かに保たれていて良かった。ボランティアさんの動きに助けられた。健康面、困り事等の聴き取り調査の集約の大切さがわかった。またトリアージ的なシールのその後の取り扱いについて知りたかった。③避難所でなくても避難されてくる方は多いと思うので、災害を想定した訓練は有意義だと思う。特に地域の方が参加することはとても良いと思った。　④子ども、お年寄り等、地域には養護学校在校生と似かよったニーズを持つ住民がいる。施設面でも食堂(厨房)、プール、給湯設備等が整っていると思う。学校が、特に養護学校が避難所の核のひとつになるよう施設設備を含め、訓練が続けられることは大切だと思う。　⑤町会として今後とも協力をしていきたいと思う。又、要介護者の問題は私達の課題ともなっている。ご協力をお願いしたい。　⑥高齢者支援をしているが、地域との連携は言うのはやさしいが、なかなか進まないことが多い。様々なところで少しずつネットワークを築いていくことができればと考える。特に防災はすべての人の関心事である。 以上が示すことは、今後の取り組みに重要な示唆を与えてくれる。来年度の取り組みに向け課題としたい。

今後の継続予定	**地域の期待感を強く感じた。内容の陳腐化を避けながら、新しい内容の訓練も実施し、今後も実施内容を精査しながら、参加しやすい訓練も目指し、地域と協働・協力しながら続けていきたい。**地域の方々を始め、多くのボランティア・障がい者団体・行政関係者等、この活動を支えてくれる方々に感謝するとともに、地域で安心して暮らせる社会づくりに寄与できるよう、今後の訓練継続に尽力したい。

７．自由記述欄　※6

※6　自由記述欄は、防災教育の実践で得られた知見、防災教育の普及に関わる提案等を盛り込んでください。また、前頁までの記述に不足した事項、参考資料、写真等を自由にご記入ください。なお、3ページ以内厳守でお願いします。

■地域と連携した防災教育・災害時要援護者支援のための「防災シミュレーション訓練」

学校と地域との共通課題である「防災対策」をテーマとすることで、地域との「連携と協働」を推進し、学校理解や障がいの理解推進をはかることを目的にとした「障がい者等災害時要援護者支援のための防災シミュレーション訓練」を 10 月 29 日（土）に地域町会・自治会・ボランティアと協力して実施しました。

■従前の取り組みと課題

本校では従前より年 3 回、火災や大地震を想定した児童・生徒向け防災訓練（避難訓練）を消防署の協力を得ながら取り組み、児童生徒が一定の避難対応方法を学ぶよい機会となっています。

平成 18 年 5 月「中越地震」、翌年 7 月「中越沖地震」が連続して発生しました。「阪神淡路大震災」の経験からも指摘されていますが、災害時、本校児童生徒のような障がいのある子どもたちが、いわゆる「避難所」で避難生活を送ることには非常な困難を伴うことが想定されます。直近の「東日本大震災」でも、やむを得ず家族とともに自家用車の中で過ごしたり、遠い縁戚に預けられる例も多かったとされています。本校児童生徒の通学域である川崎北部・横浜北部では災害時要援護者を対象にした避難所（福祉避難所又は二次避難所）の指定が進みつつありますが、十分とは言えません。

神奈川県では「学校における地震防災活動マニュアルの作成指針（平成 23 年 7 月改定修正版）」により、「災害が発生した場合や、警戒宣言が発令された場合などの緊急時には、避難所等としての指定の有無に関わらず、地域住民等が学校に避難してくることが予想されるため、避難所等に指定されていない学校においても、避難者に対して適切な対応ができるよう、避難対策等に係る計画を定めておくことが重要です。」としています。さらに、「特別支援学校については、通常の避難所での生活が困難であると思われる、障がいのある子どもやその家族が避難できる場所としての活用を、想定しておくことが望まれます。」としています。

■　防災シミュレーション「避難所設営訓練」実施の内容

本校では平成 19･20 年度は文部科学省の地域活性化推進事業として、22･23 年度は川崎市高津区協働事業として、「大規模災害時障がい者等要援護者支援のための防災シミュレーション訓練」を実施してきました。（平成 21 年度はインフルエンザ対策のため中止）

実践内容は、毎年 7 月より、過去の震災での要援護者の状況や川崎･横浜両市の要援護者向け防災対策を学ぶ「保護者・支援者向け学習会」や「夜間親子避難所体験」、障がいの理解のための学習や防災マップ作り、避難所運営の方法等について学ぶ「防災ボランティア養成講座」を実施し、その成果を生かす形で、10 月末に児童生徒とその保護者、地域町会・自治会、ボランティア等、約 150 名が参加し防災シミュレーション訓練（避難所設営訓練）をおこなっています。

ここでは、①避難所設営訓練　②避難テント設営訓練　③要援護者支援訓練　④炊き出し訓練

⑤足湯訓練（ＰＴＳＤ対策）⑥避難所運営訓練等を行い、児童生徒とその保護者も、避難所設営やトイレ用水運搬などを体験しています。障がいのある子ども用に準備した、パーティション用のプレートは高齢者にも好評でした。

■取り組みのまとめと今後の課題

参加者からは、「障がい者でも参加しやすい訓練である」ことや「特別支援学校が避難所の核のひとつになるよう、訓練が続けられることは大切だと思う。」等、好意的な意見をいただいています。

過去 5 年間の実践はこの訓練が地域の方々に期待感を持って迎えられていることを示しています。昨年度から川崎市高津区との「協働事業提案事業」として採択され、学校・地域と行政を加えた広がりを見せています。また、内閣府主催の「防災教育チャレンジプラン」から本校の取り組みを全国に発信する機会を与えられました。

「3.11 東日本大震災」でも、本校児童生徒のような知的障がいのある子らの支援のあり方が課題であることを指摘されています。この訓練が地域との防災ネットワーク作りに寄与するとともに、「地域との連携と協働」による防災対策が進展すればうれしいことです。

地域の方々を始め、多くのボランティア・障がい者団体・行政関係者等、この活動を支えてくれる方々に感謝するとともに、地域で安心して暮らせる社会づくりに寄与できればと願っています。

東日本大震災被災地障害者施設の授産品（クッキー）を販売、支援活動をおこないました

※平成２２年９月３日（土）９：４５～１４：３０　高津養護学校川崎北分教室

川崎北分教室ボランティア活動

高津養護学校川崎北分教室 1 年生 13 人は 6 月「情報基礎」の授業「インターネットで調べよう！」を行い、東日本大震災で障がい者施設が大きな被害を受けていることを知りました。直接、地震や津波の被害を受けた施設だけでなく、建物の被害を逃れた施設でも授産品の販売先が被災し、販売額が急減、授産費（勤めている障がい者の給料になります）が支払えなくなるなどの被害を受けました。

なんとか、支援ができないか？との生徒の思いから、9 月の川崎北高校文化祭「北斗祭」で被災した、宮城県の障がい者施設でつくっている「クッキー」を仕入れ、販売し、売り上げを寄付しようということになりました。

同時に、喫茶コーナーを開設し、お茶やジュースとともに販売し、職業授業「接客業務」の学習の一環としました。

クッキーは予定していた 250 袋を完売し、利益は川崎北高校生徒会に寄付し、被災地へ送られました。

「いらっしゃませ！」大きな声でお客様に呼びかけます。

川崎北高生徒もたくさん来客し交流も弾みました。